



第二中学校だより

令和6年1月号

↓二中ホームページ↓



「明るい挨拶 光る汗 きれいな学校 きれいな心」

自分で限界を作っていないですか？

校長 小関 直

毎年恒例の箱根駅伝を見ました。近年は、学生スポーツの在り方としてどうなのかなあ、という思いもあり、あまり中継を見なくなりましたが、K大学一強という構図に興味をそそられました。結果はご存じのとおり、A大学が大会新記録で優勝。「準優勝でいい」と言っていた監督自身がびっくりする結果となりました。改めて学生スポーツの良さを認識する機会となりました。それは、心を鼓舞して挑めば、限界を超えられるということです。

「もうこのくらいでいいや」でいいのか？

学校で子供たちと接していると、自分で限界を作ってしまう子をよく見かけます。受験や部活の大会前になると、そのしんどさから「もうこのくらいでいいか？」と途中でやめてしまいがちです。もちろん無理はいけません。大人からの強要にも反対です。でも、時には限界を超えるべく努力する経験もまた大切です。

ところがそれには大変な労力が伴います。人は、今日だけでなく、明日もまた平穩に生きたいと願うものです。そのため、どうしてもエネルギーを温存しがちになります。限界を作ることは、もしかしたら、人間の本能なのかもしれません。

では、限界を超えるためにはどうしたらよいか。ノウハウがあるわけでも、うまい方法があるわけでもありません。しかし、少なくとも、「容易ではない」が、「限界に挑む苦痛を乗り越えた先に大きな成長がある」ことだけは、大人が伝える必要があると思います。そこに挑むだけの価値があるかどうかは、本人が決めることです。

著名人が言う「限界」とは？

価値に気が付き、限界に挑んだ著名人の言葉を検索してみました。

- ・大谷翔平（野球選手）
「自分の限界を作りたくない。」
- ・マイケル・ジョーダン（バスケットボール選手）
「無理だなんて絶対に口にするな。限界は恐怖と同じで、たいてい幻想に過ぎないから。」
- ・山高篤行（外科医）
「全身全霊で挑まなければ限界はわからない。」
- ・レディー・ガガ（歌手）
「限界なんて最初から存在しないのよ。あると思い込んでいるだけ。」
- ・イビチャ・オシム（サッカー）
「限界には限界はありません。」
- ・ヘレン・ケラー
「自分の限界を考えたことはありませんし、限

界の存在は悲しむべきものではありません。」
・飯田亮（実業家）

「人間の可能性の限界は、その人の空想力の限界である。」

たくさん出るわ、出るわ。これはほんの一部です。ジャンルは関係ありません。また、これら著名人に共通していることは、家族やこれまでに出会った人々に対する感謝の言葉を述べているという点です。その人なりの良さを引き出し、認めてくれる人の存在が、限界を超える原動力になっていたのかもしれない。

周囲の大人の理解と励ましが必要

否定的な言葉で叱られ続けたり、指示・命令ばかりを言われ続けたりすると、「自分はこんなものだ」と落ち込んだり、「ノルマは達成したからもうおしまい」と活動を打ち切ったりして、モチベーションも上がらないものです。やはり、周囲の大人は、時にはほめながら「あなたには大きな可能性がある。歯を食いしばってがんばるときも必要だ。」と励ましてほしいと思います。

人間の話ではありませんが

昆虫の「ノミ」は、数ミリ程度の体長に対し150倍位のジャンプ力があると言われます。人間に置き換えると、何百メートルもジャンプする計算になります。ところが、ノミをコップに入れ、フタを被せてしまうと、ノミはいくらジャンプしてもフタの縁に頭をぶつけてしまうので、「私はここまでしか飛べない」と思ってしまい、コップのフタを外してもノミは外に飛び出せなくなってしまいうそうです。

一方、その限界を作ったノミを元のジャンプ力に戻す方法もあるそうです。それは、別の元気なノミの集団に、限界を作ってしまったノミを戻すだけのことだそうです。環境ひとつでノミの能力は変わっていくという話ですが、これは人間にもつながる話のような気がします。

冒頭のA大学は、一人一人が限界を超えようとする集団になっていたような気がします。それを支えるバックグラウンドには、家族、監督の存在があったはずで、共に高みへ昇っていく集団には、素敵な生き方を共有し、限界を設けずいろいろなことにチャレンジしていく姿が見え隠れします。学校も見習いたいものです。

まとめの3学期を迎えました。個人と集団がツウウェイで高まり、卒業、進級に向けて限界を超えていけるよう支援してまいります。